

(様式1)

「課題発見・解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」  
平成28年度委託事業完了報告書【総括】

都道府県名	大分県	番号	44
-------	-----	----	----

推進地区名	協力校名	児童生徒数
杵築市	杵築市立宗近中学校	201

○ 実践研究の内容

【目 標】「学びに向かう力」と思考力・判断力・表現力の育成
【重点方針】 1 目標達成に向けた組織的な授業改善の徹底
2 「中学校学力向上対策3つの提言」の推進

1. 推進地域における取組 (○成果 ●課題)

(1) 市町村が作成する学校組織をあげた学力向上の行動計画である市町村学力向上アクションプランを踏まえた人的配置

① 学力向上支援教員の配置

・県内市町村に学力支援教員72名を配置。

○「学びに向かう力」と思考力・判断力・表現力を高める指導方法の工夫改善による児童生徒の学力向上を目指して、効果的な取組を追究し、校内はもとより域内の授業改善の推進を行った。  
→ 推進地区3名、推進校1名配置

② 習熟度別指導推進教員の配置

・県内市町村に習熟度別指導推進教員54名を配置。

○自校あるいは兼務校において習熟度別指導を実施すると同時に、市町村教育委員会の指導の下、習熟度別指導の効果的な進め方等について発信しその導入・推進に努めた。

→ 推進地区3名配置

(2) 「学びに向かう学校」づくり中核校の指定と取組の周知

① 「学びに向かう学校」づくり講演会の実施 [H28. 6. 3 (金)]

◇福井県敦賀市教育委員会指導主事による講演。演題「福井県の教育力の秘密」。

○協働（教員と教員・学校と家庭地域）による学力向上について理解と実践意欲が高められた。

○教科担任の「タテ持ち」の意図や効果についての理解が高められた。

→ 推進地区指導主事及び推進校校長・指導教諭参加

② 「学びに向かう学校」づくり中核校生徒連絡協議会 [H28. 8. 8 (月)]

◇中核校11校の生徒による取組の発表及びグループ協議を実施。

○生徒の手による学力向上の取組についてポスターセッションで交流できた。

○グループ協議では、各校の発表を踏まえ、「学びに向かう学校をつくるためのキーワード」を話し合った。初めて会う生徒同士であったが、目的意識が高く、充実した協議を行うことができた。

○協議の内容は大分県の広報テレビ番組で放映し、中核校の取組を県内に広めることができた。  
→ 推進地区生徒12名うち推進校生徒9名参加

③ 「学びに向かう学校」づくりに係る先進地研修 [H28. 10. 20 (木) ~22 (土)]

(訪問校) 岐阜市立長良西小学校、岐阜市立長良中学校

(参加者数) 37名

(参加者) 校長・指導教諭・市町村教育委員会指導主事・県教育委員会指導主事

○特別活動や総合的な学習の時間の充実による児童生徒の学びに向かう姿を目の当たりに

し、目指す姿を明確にすることができた。

○小中連携教育や小学校外国語教育について理解が深まった。

○伝統のある組織的な校内研究による授業を見ることができた。

→ 推進校指導教諭参加

④「学びに向かう学校」づくり中核校（11校）連絡協議会〔H29. 2. 16（木）〕

○各学校で学びに向かう雰囲気が醸成されつつある。

○生徒指導の三機能を意識した授業改善がなされるようになった。

●すぐには各種学力調査結果に反映されないが地道に取り組む必要がある。

→ 推進地区指導主事及び推進校校長・指導教諭参加

(3) 中学校の教科部会を活用した授業改善支援

① 文部科学省教科調査官等を招聘しての中学校教科指導力向上協議会〔国・社・数・理・英〕の実施。各回とも県内中学校1名以上の参加。

○今、求められている授業像について理解が深められた。

●理論的に理解できても、実践に難しさを感じている教員が少なくない。

→ 推進地区指導主事及び推進校教科担当教諭参加

② 県内各地区（郡市別）の教科部会を活用した協議会〔推進地区で5教科実施〕

○県内16地区で実施し、授業研究・講義を設定し、具体的で実践的な指導助言ができた。

○各地区の取組状況に応じた指導助言を義務教育課担当指導主事が行うことができた。

●地区によって取組や協議の深まりに差異が見られる。

→ 推進地区指導主事及び推進校教科担当教諭参加

(4) その他の取組

① 授業改善協議会（各教育事務所で実施・年間3回）

◇授業改善に焦点化した協議会を、各教育事務所管内の学校の実態を踏まえ、3回分のストーリーをもって実施。

→ 推進地区指導主事及び推進校校長・指導教諭参加

② 学力向上会議〔各小中学校で実施・年間2回（8月・2月）〕 → 推進地区各小中学校実施

③ 杵築市立宗近中学校（推進校）研究発表会指導助言〔H28. 9. 21（水）〕

(5) 学力向上推進計画

外部有識者、各市町村学校教育主管課長等で組織する学力向上検証会議を9月、2月の2回実施し、課題を整理し、以降の計画を策定した。

〔第1回（9月）〕全国学力・学習状況調査結果及び大分県学力定着状況調査結果を受け、9月以降の取組として決定された事項

(1) 組織的な授業改善により「新大分スタンダード」に基づく授業の質の向上を図る

①各学校の児童生徒の解答状況・質問紙回答状況を活用し、授業改善5点セットの見直しを行う。「質の向上」のターゲットを絞り込む。

(取組の例)

○習得と活用のバランスを考え、付けたい力（具体的な評価規準）を明確にした単元構想に基づく授業実践

⇒提案授業・互見授業において単元全体の作り方を協議事項に取り上げる。

○「めあて・課題・まとめ・振り返り」の質の向上を意識した授業実践

⇒板書を相互批正し、児童生徒の立場からその適否を検討する。

○生徒指導の三機能を意識した授業づくりによる講義型授業からの脱却

⇒毎時間の授業の流れをメモし、生徒指導の三機能のうち二つ以上が場面として設定されていたかを振り返る活動を継続する。

\* 「新大分スタンダード」に基づく授業観察シートの活用

\* 「めあて・課題・まとめ・振り返り」例の活用

\* 「全国学力・学習状況調査 授業アイデア例」（国立教育政策研究所）の活用

(2) 家庭学習指導・補充指導の見直し

①全学年の家庭学習の実態を確認すると共に、多くの学校が家庭に示している「家庭学習の手引き」等の内容や活用方法が実態に合っているか再確認する。特に、基礎的・基本的な知識・技能の定着に結びつく宿題になっているか、宿題の内容や出し方、点検の在り方を学年部会や教科部会で検討する。一定の時間で効果のある家庭学習の在り方を全教員が共通理解して指導する。

②学校全体で、特に低学力層にいるの児童生徒にとって学びがいのある、力の付く補充指導になっているか、指導方法や指導内容、指導体制について見直す。

### (3)「中学校学力向上対策3つの提言」の実行(中学校)

- ①校長がリーダーシップをとり、主幹教諭・教務主任が中心となって、今年度の校内体制でできる教科指導力向上の仕組みを工夫する。
- ②主幹教諭・教務主任が中心となって、実際に生徒による授業評価を授業改善に生かす取組を行う。
- ③教員が目指す授業像を生徒集会で語ったり、生徒会による学習環境整備の取組を進めたりするなど、具体的に行動を起こし、生徒の「学びに向かう学習集団」づくりの意欲を高める。

[第2回(2月)]「新大分スタンダード」及び「中学校学力向上3つの提言」実施状況調査後、2月以降の取組として決定された事項

### (1) 具体的な評価規準の設定及び習熟の程度に応じた指導の充実に指導・助言の重点を置き、「新大分スタンダード」の視点から授業の質の向上を図る。

- ①「ねらい」の質の向上
- ②ねらいに対応し、ゴールの姿を具体的に描いた評価規準の設定
- ③適切な「めあて・課題・まとめ・振り返り」の設定
- ④習熟の程度に応じたきめ細かい指導の工夫
- ⑤単元構想力の向上を目指した取組の推進
  - ・義務教育課が各教科の単元プラン例を今年度中に提示する。
  - ・平成29年度の学力向上支援教員配置校に単元プランの提供を求める。

### (2) 中学校学力向上対策3つの提言の推進(県教委・市町村教委による指導・支援)

- ①組織的な授業改善の推進について
  - ・校内研究の「授業改善テーマ」を意識して授業改善を行った教員の割合は9割程度である。全員が授業改善の取組内容・取組指標を意識したものになるよう指導する。
- ②学校規模に応じた教科指導力向上の仕組みの構築について
  - ・教科担任の「タテ持ち」については、推進している趣旨を確認しながら、意図的に導入するように働きかける。(今年度中、機会あるごとに)
  - ・県教育委員会は、「中学校学力向上対策3つの提言」推進重点校と連携し、日課表の編成や教科部会の持ち方等について実践的研究を行う。
  - ・複数の学校が連携して実施する教科部会については、教科に関する協議会等で好事例を紹介する。
- ③「生徒と共に創る授業」の推進について
  - ・「学びに向かう学校」づくり中核校生徒連絡協議会等、各学校の取組を交流する生徒による情報交換の場を引き続き設定する。
  - ・県教育委員会は、「中学校学力向上対策3つの提言」推進重点校と連携し、生徒による授業評価を活用した授業改善の在り方について研究する。

### (3) 県教育委員会HPによる情報提供の充実

- ・学力調査結果に基づく取組の好事例等については、該当校の協力を得て一層の充実を図る。

### (4) 全国学力・学習状況調査問題の活用

- ・各学校は、全国学力・学習状況調査の調査終了後、直ちに調査問題を全教員が解き、その感想を交流するなどして、自分の教科に生かすべきところや指導の改善点について協議する。

### (5) 目指す授業像の共有

- ・各中学校は、年度当初に目指す授業像を生徒と共有する取組を行う。

## 2. 推進地区における取組

### (1) 協力校に対して、本実践研究の円滑な実施のために行った指導・助言の状況について

#### ① 「学びに向かう学校づくり」の推進

県教育委員会の方針を受け、平成28年度の「学びに向かう学校づくり」の推進について市の方針を各学校に示した。特に協力校（「学びに向かう学校づくり」中核校）については、生徒会による組織的な学校目標の設定と振り返りによる共に学び合う集団づくりを推進した。また、協力校の取組と成果を市内小中学校に広く公開するよう指導し、平成28年9月21日に実施した協力校の公開授業研究会を支援した。公開授業研究会では、「活用する力の育成」を研究テーマに、問題解決的な展開の授業づくりについて、指導教諭（研究主任）より報告があった。公開授業では、生徒指導の3機能を生かした場面を意図的につくることにより、主体的で対話的な生徒の姿が見られた。

#### ② 検証・改善サイクルによる組織的な授業改善の推進

市独自様式の「学力向上プラン」を作成し、「授業改善の5点セット」を活用したマネジメントサイクル（PDCA サイクル）による組織的な授業改善を推進した。指導主事による年2～3回の指導訪問を行い、取組状況について確認した。また、学期毎に達成状況についても把握し、指導助言を行った。

### (2) 杵築市教育委員会の学力向上支援教員・習熟度別指導推進教員を活用した取組について

#### ① 学力向上のための広報誌作成

協力校に配置している学力向上支援教員による年3回の「新大分スタンダード」を意識した公開授業に対し指導・助言を行った。また、指導案及びワークシート等を、市内ネットワークシステムを活用した共有フォルダに集め、市内教員がいつでも活用できるようにしている。また、大分県教育委員会が杵築市に配置した学力向上支援教員及び習熟度別指導推進教員（計6名）に通信「学力の花」を年3回の作成することを依頼し、市内各小中学校に配信した。この通信により、「新大分スタンダード」を踏まえた授業づくりを推進した。

#### ② 学力向上対策委員会の実施

市内小中学校の学力向上を推進するために、学力向上対策委員会を設置した。全国学力・学習状況調査結果や大分県学力定着状況調査結果を受け、学力向上支援教員等による分析と今後の対策をまとめ、校長連絡会等で周知するとともに、各学校にも今後の対策について報告するよう指導した。また、小中学校の教員を対象にB問題を活用した授業づくりについての研修会を行った。

## 3. 協力校における取組（詳細については研究紀要参照）

### (1) 学力向上プランの作成

### (2) 活用する力の育成を目指した問題解決型の問いの工夫

### (3) (2) に連動した板書の工夫

### (4) 基礎・基本事項定着のための習熟の程度に応じた支援と補充学習

### (5) 生徒会の自治活動による学びに向かう態度の育成

### (6) 家庭との協働による学習意欲の喚起

### (7) 学習環境の整備

## ○ 実践研究の成果

### 1. 協力校における取組の成果

#### (1) 問題解決的展開の学習

12月に実施した生徒アンケートでは「授業では課題の解決に向けて話し合いながら整理して発表する等の学習活動に取り組んでいたと思う。」の肯定的評価が7月より増加し、全校で約82%であった。問題解決的な展開の授業を教師が意識して行うようになった。

#### (2) 板書の構造化と思考の流れの可視化

問題解決的展開の学習での板書パターンを決めることで、1時間の学習過程も決まってくる。

それによって、生徒が見通しを持って、課題の把握→個人の思考→グループ討議→全体交流・討議→まとめ・振り返りという学び方が身に付いてきた。

### (3) 説明力の向上

「自分の考えを他人に説明したり、文章に書いたりするのは難しい」「400字詰め原稿用紙2枚程度の感想文や説明文を書くことは難しい」という質問項目では、否定的な回答が増えた。特に3年生では難しいと思わないと回答した生徒が多く、説明することへの苦手意識が解消しつつある。

### (4) 学びに向かう力「目標設定サイクル」

文化委員会の「目標設定サイクル」によって、1ヶ月単位で自己目標を設定し、振り返るといった流れが定着した。文化委員が学級で地道に声をかけたり、チェックをくり返したりする中で、目標自体の質も「～にがんばる」といったおおざっぱなものから、「1日2時間学習する」「1時間に2回以上手を挙げる」などの検証しやすいものに変化してきた。

### (5) 「学習ステーション」

図書委員会の「学習ステーション」は学び合いの効果をねらったものである。参加者は毎月全校でのべ200人前後、1日の利用者数が各学年平均7～8人。多い日は30人を超える。3年生は「MY生徒・MY先生制度」を推奨し、グループで利用する生徒が多い。わからないところを気軽に尋ねるだけでなく、学習面での悩みを共有し、解決する場にもなっている。

また、生徒の中から学習サポーター10名を認定し、学習支援と新聞切り抜き・掲示による社会への関心の向上、さらに定期考査前には高品質の予想問題の作成に取り組んだ。「教えてもらおう」側はもちろんだが、「教える」上位層の生徒にとっても有効な手段であった。効果的な説明の仕方や問題の出し方について思考することができるようになった。

## 2. 実践研究全体の成果

### (1) 推進地域における取組の成果の把握

『学びに向かう力』と思考力・判断力・表現力の育成」を目標に掲げ、「目標達成に向けた組織的な授業改善の徹底」と『中学校学力向上3つの提言』の推進」を重点方針として取り組んだ。全国学力・学習状況調査等による客観的な数値による取組の検証は来年度4月の調査結果を待つことになるが、ここでは本県が掲げている「新大分スタンダード」の取組の経年変化比較、「中学校学力向上3つの提言」実施状況によって検証する。

#### ○「新大分スタンダード」の取組の経年変化比較

(調査基準日) 平成29年1月20日

(調査対象) 大分県内公立小・中学校で実際に授業をする教員5、483人

質問項目	28年度			27年度			26年度		
	小	中	合計	小	中	合計	小	中	合計
①「めあて・課題」を設定した教員数	99.2%	98.4%	98.9%	98.7%	97.2%	98.1%			
②振り返る活動を計画的に取り入れた教員数	94.7%	90.2%	93.0%	95.7%	90.8%	93.9%			
③板書を構造化した教員数	94.5%	88.6%	92.2%	93.2%	86.1%	90.5%			
④ノートに学習の「めあてや課題」と「まとめや振り返り」を書くように指導した教員数	95.4%	85.3%	91.5%	95.2%	83.1%	90.7%			
⑤習熟の程度に応じたきめ細かい指導を工夫した教員数	88.7%	71.4%	82.0%	90.9%	73.2%	84.3%			
⑥単元あるいは1単位時間で問題解決的なプロセスの授業を実施した教員数	92.4%	89.0%	91.1%	92.5%	83.1%	89.0%	87.4%	77.9%	83.8%
⑦単元または1単位時間内で生徒指導の三機能を意識した授業づくりをした教員数	93.2%	87.6%	91.1%	91.6%	84.0%	88.8%	93.0%	81.8%	88.8%
⑧ねらいに対応しゴールの姿を具体的にした評価規準を設定して授業をしている教員数	89.2%	79.8%	85.6%	87.8%	80.6%	85.1%	80.8%	66.9%	75.5%
⑨校内研究の「授業改善テーマ」を意識して授業改善を行った教員数	95.1%	90.4%	93.3%	94.8%	91.3%	93.5%			
⑩県教委が示した「めあて・課題・まとめ・振り返り」例を活用した教員数	89.7%	81.1%	86.4%						

#### ①小学校

○9割以上の教員が「新大分スタンダード」に基づく授業を実施している。「めあて・課題」の設定については、ほぼ全ての教員が実施している。

#### ②中学校

○小学校に比

- べ、いずれの項目も、肯定的回答の教員の割合は小さいが、経年で見た場合、中学校においてはこの2年間で「新大分スタンダード」に基づく授業改善が急速に進んできた。
- 特に、「めあて・課題の設定」「振り返る活動の計画的な設定」については9割以上の教員が実施したと回答している。
  - 単元あるいは1単位時間で問題解決的なプロセスの授業を実施した教員の数は平成26年度と比較すると10%以上増えている。

### ○「中学校学力向上3つの提言」実施状況

(調査基準日) 平成29年1月20日 (調査中学校数) 127校

- ほとんどの中学校が、学校規模に応じた教科指導力向上のための取組を実施したと回答している。
- 生徒による授業評価を実施し、それを授業改善に反映した学校の割合は、94.7%である。  
7月の調査によると、学校評価と合わせて学期に1回程度実施している学校が6割程度ある。
- 学校が目指す授業像を生徒と共有し、それに向かう学習集団としての目標を設定させ、適宜振り返り活動を行ったと回答した中学校は、90.3%である。

質問項目	中学校
①学校規模に応じた教科指導力向上のための取組を行った学校	99.1%
②生徒による授業評価を実施し、それを授業改善に反映した学校	94.7%
③学校が目指す授業像を生徒と共有し、それに向かう学習集団としての目標を設定させ、適宜振り返り活動を行った学校	90.3%

## 3. 取組の成果の普及

### (1) 推進地域における取組

- ◇以下の協議会や講演会の概要を大分県教育委員会ホームページに掲載した。
  - ①「学びに向かう学校」づくり講演会〔H28.6.3(金)〕
  - ②「学びに向かう学校」づくり中核校生徒連絡協議会〔H28.8.8(月)〕
  - ③「学びに向かう学校」づくり中核校(11校)連絡協議会〔H29.2.16(木)〕
  - ④第1回中学校教科指導力向上協議会〔国・社・数・理・英 計5回〕
  - ⑤平成28年度第1回及び第2回学力向上検証会議資料
- ◇「学びに向かう学校」づくり中核校生徒連絡協議会〔H28.8.8(月)〕については大分県広報テレビ番組「オオイタ・コレクション」で放映した。
- ◇「個に応じた指導の手引き」を作成し、県内全ての小中学校に配布(平成29年度末配付予定)

### (2) 推進地区における取組

- ◇推進校を市研究指定校とし、研究発表会により推進地区内小中学校教員を対象に取組の一端を発表した。〔平成28年9月21日(水)〕
- ◇研究校においては、研究紀要を推進地区内小中学校に配付し、情報提供を行った。

### ○ 今後の課題

- ◇大分県教育委員会は、全ての小中学校で「新大分スタンダード」の実践による組織的な授業改善を進めている。その取組状況は経年で比較すると好ましい方向へと向かいつつあるものの、全ての学級で実践されているとまでは至っていない。また、「めあて」や「課題」「まとめ」の内容、ねらいに対応した評価規準等、その質についてみたとき、十分でない教室が散見される。今後も授業改善のための研修会を開催したり、実際に学校を訪問して「新大分スタンダード」による授業改善を進め、その質を高めていく必要がある。
- ◇本県では全国学力・学習状況調査結果から中学生の学力向上に課題があり、引き続きその解決のための「中学校学力向上対策3つの提言」の推進に取り組む必要がある。来年度は、「学びに向かう学校」づくり中核校の取組の成果を広く県内に普及するとともに、「中学校学力向上対策3つの提言」重点推進校を指定し、提言の実行を支援しながら具体的な取組を県内の中学校に広め、中学生の学力向上につなげていく。

## 新大分スタンダード

新大分スタンダードで  
主体的・対話的で深い学びを！

「学びに向かう力」と思考力・判断力・表現力を育成するワンランク上の授業

### 1 1時間完結型

「主体的な学び」を促す「めあて」「課題」「まとめ」「振り返り」

- \*学習の見通しをもたせ、意欲を高める「めあて」
- \*学びの成果を実感し、学んだことや意欲・問題意識等を次につなげる「振り返り」
- \*追究すべき事柄を明確にする「課題」、追究した結果を明確にする「まとめ」

### 2 板書の構造化

\*思考を整理したり促したりする板書、思考の過程を振り返ることができる板書

### 3 習熟の程度に応じた指導

- \*「具体的な評価規準」に基づく確かな見取り
- \*「努力を要する状況」の児童生徒に対する手立ての工夫



安心して学べる「学びに向かう学習集団」

### 4 生徒指導の3機能を意識した問題解決的な展開

主体的・対話的で深い学びを創造する学習展開

各教科の見方・考え方を働かせて展開する「課題設定⇒情報収集⇒整理分析⇒まとめ・発信・交流⇒振り返り・評価」等の学習過程の中で行われる

- \* 問いの発見・解決、自己の考えの形成・表現、思いに基づく構想・創造
- \* 様々な人との対話・協働による自分の考えの深化・拡充

## 中学校学力向上対策 3つの提言

大分県教育委員会（H28年2月）

### 1 学校の組織的な授業改善による「新大分スタンダード」の徹底

- ①生徒指導の三機能を意識した問題解決的な展開の授業を充実させるとともに、習熟度別指導を積極的に導入する。
- ②教科の壁を越え、全ての教科に共通した授業改善の取組内容を設定し、その視点に基づく互見授業・授業研究を実施する。

### 2 学校規模に応じた教科指導力向上の仕組みの構築

- ①小規模校は、校内研修の枠で、近隣の学校と合同教科部会をもち、指導案や評価問題、教材の作成等を行う。
- ②複数の教科担任がいる学校は、教科担任の「タテ持ち」や日課表・週時程表に位置づけた教科部会の実施により、相談や切磋琢磨できる環境を作る。

### 3 「生徒と共に創る授業」の推進

- ①生徒による授業評価を実施し、それを授業改善に反映する。
- ②学校が目指す授業像を生徒と共有し、それに向かう学習集団としての目標を設定させ、適宜振り返り活動を行う。

(様式2)

「課題発見・解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成28年度委託事業完了報告書

【推進地区】

都道府県名	大分県	番号	44
-------	-----	----	----

推進地区名	大分県杵築市
-------	--------

○ 推進地区として実施した取組内容

1. 研究課題

「学びに向かう力」と思考力・判断力・表現力等の育成

2. 研究課題への取組状況

(1) 授業改善に関する取組

①協力校に対して、本実践研究の円滑な実施のために行った指導・助言の状況について

○「学びに向かう学校づくり」の推進

大分県教育委員会の方針を受け、平成28年度の「学びに向かう学校づくり」の推進について市の方針を各学校に示した。特に中核校については、生徒会による組織的な学校目標の設定と振り返りによる共に学び合う集団づくりを推進した。また、中核校の取組と成果を市内小中学校に広く公開するよう周知し、平成28年9月21日に公開授業研究会が実施された。

「活用する力の育成」の研究テーマのもと、問題解決的な展開の授業づくりについて、指導教諭（研究主任）より報告があった。公開授業では、生徒指導の3機能を生かした場면을意図的につくることにより、主体的で対話的な生徒の姿が見られた。

「学びに向かう学校づくり」の推進について

平成28年4月  
杵築市教育委員会

- 生徒の「学びに向かう力」の育成
- 生徒の思考力・判断力・表現力等の育成

○生徒指導の3機能を生かした「新大分スタンダード」による授業改善の実施

【市内中学校】  
・学校の課題を明らかにし、「新大分スタンダード」を取り入れた授業改善計画と授業改善の5点セットを作成し、PDCAサイクルを取り入れた組織的な授業改善の実施。(学力向上プランへの位置づけ、教育課程の見直し)  
・「3つの提言」に係る取組。  
・学力調査の結果を授業改善に生かす取組。  
・NIEの活用。  
・ICTの活用。  
・補充学習、家庭学習（家庭との協働）の充実。  
・管理職による授業観察や、互見授業の効果的な実施。(授業観察シートの活用)  
・先進校視察による報告会。  
【中核校】  
・公開授業（要請訪問と兼ねて可。市内小中学校参観の呼びかけ。）  
・実践報告（教務主任会議等）

【市教研教科部会】  
・市教育委員会指導主事や学力向上支援教員・習熟度別指導推進教員を活用した教科別研修会の実施。

【学力向上支援教員・習熟度別指導推進教員】  
・「新大分スタンダード」を具体化した授業公開を実施。  
・教科部会での研修会実施。  
・関係校等（T2）での授業観察と指導・助言。

○共に学び合う集団づくりを重視した学級経営や生徒会活動の積極的な推進

【市内中学校】  
・生徒と教師が自校の学習や生活における課題を共有して目標を設定し、その達成を目指した共に学び合う学級集団づくり。  
【中核校】  
・生徒による学習目標の設定（教室の掲示）→取組→振り返り→次の取組（PDCA）  
・文化委員会、生活委員会等、生徒会活動を生かした組織的な取組。（掲示板等の活用）  
・Q-U調査の活用



大分県教育委員会による中核校連絡協議会における生徒による実践報告会



## ○市全体、学校全体で取り組む授業改善

・市独自様式の「学力向上プラン」を作成し、「授業改善の5点セット」を活用したマネジメントサイクル (PDCA サイクル) による組織的な授業改善を推進した。指導主事による年2～3回の指導訪問を行い、取組状況について確認した。また、学期毎に達成状況についても把握し、指導助言を行った。

・市内3校を市研究指定校とし、大分県教育センターの出前研修及び学力向上支援教員等を活用した研修会を実施した。「新大分スタンダード」を意識した授業づくりを推進し、3回目の指導訪問時の授業を市内小中学校に自主公開した。

・可能な限り担任以外の教員を活用した習熟度別指導を推進し、市内3中学校では、全ての学校で習熟度別指導が行われた。(数学

2校、英語1校) また、市内の小中学校 (中規模校1校、小規模校10校) では、7校で算数の習熟度別指導が行われた。さらに効果的な習熟度別指導について、習熟度別指導推進教員 (英語1名、数学1名、算数1名) による年3回の公開授業研への参加を促し、指導主事による事前・事後の指導助言を行うようにした。

・小中学校全ての教科部会で公開授業による研修会年4回以上をもち、学校間、校種間を超えた授業改善を行っている。特に、中学校の学力向上支援教員等が配置されている教科部会 (国語、数学、英語) では、年5～9回の教科部会が開かれ、各部会のテーマ等に沿った提案授業についての協議や、評価問題等の作成が行われ、情報交換が行われた。

【梓陽市】学力向上プラン (様式)

研究協議に関するものは○で、研究授業に関するものは●で記入する。「目標達成に向けた組織的な授業改善」推進の手引き (以下「手引き」と記載) P11、12を参考に。授業改善計画は4月～3月 (1年間分) を記入する。

Ⅰ 授業改善計画 (研究協議・研究)	【4月～6月】	【1月～3月】
(例) <目指す授業像の明確化> ○生徒の実態把握と問題点の共通理解 ○「授業改善5点セット」の共通理解 ○基礎となる理論研究 ○目指す授業像の共有 ○互見授業の設定 ●目指す授業像の共有を図るための授業		用紙はA3、1枚をお願いします。
Ⅱ 児童生徒の課題	各種学力調査等の結果の分析・考察 ・日頃の教科学習状況から言えること	児童生徒実態調査等の分析・考察 ・学校生活状況 (生活面全般ではなく、学力と相關関係の強いもの) から言えること
Ⅲ カリキュラム	達成指標 ①授業 ②課題 ③取組内容 ④取組指標 ⑤検証指標 (目指す児童生徒像)	達成状況 1学期 2学期 3学期
Ⅳ 考察	重点目標 ①授業 ②課題 ③取組内容 ④取組指標 ⑤検証指標 (目指す児童生徒像)	達成状況 1学期 2学期 3学期
	重点1 > めあてやねらい、課題が明確化された授業の推進 重点2 > 問題解決的な授業の推進	81% 88% 92% +2ポイント +5ポイント +8ポイント
	重点2 > 単元に1～2回以上、考えを書いてまとめて交流する活動を設定するとともに、交流後には考えの変化を生徒に記録させる。記録は単元毎に点検し、授業改善に反映させる。また、交流の価値のある多様な考え方を引き出す課題の設定を工夫する。	生徒意識調査における回答者の割合 ◆「めあて・課題を見て、本時に何を学ぶのかを理解した上で授業に取り組む」と回答する生徒の割合を84.9%以上にする。
	重点3 > 単元毎に点検し、授業改善に反映させる。また、交流の価値のある多様な考え方を引き出す課題の設定を工夫する。	生徒意識調査における回答者の割合 ◆「普段の授業で、友だちと話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり広げたりすることができている」と回答する生徒の割合を7ポイント増やす。
Ⅴ 次年度に引き続く改善策	プロジェクト1についての改善点は、手引きP26を参考に。	プロジェクト1の考察は、「児童生徒の状況・課題」(指導の状況・課題) を書く。「授業改善テーマに取り上げたこと」に関する状況の他に「学力調査から新たに明らかになった問題点」についても書くことが考えられるが、具体的な取組に焦点化させるように、取り上げ方を工夫する。 3学期については、残された課題だけでなく、新たな課題があれば記述する。できるだけ次年度につながるように書く。 考察からの修正は、「再入力」、付録は「____」で記入する。

※提出日 (1回目) 平成28年5月9日 (月) (2回目) 平成28年9月9日 (金) (3回目) 平成29年2月27日 (月)

②成果発表会や研修会等の開催、実践事例集の作成、インターネットによる情報提供などの取組について

### ○学力向上支援教員・習熟度別指導推進教員を活用した取組

学力向上支援教員3名(小国2名、中国1名)、習熟度別指導推進教員3名(小算1名、中数1名、中英1名)による年3回の「新大分スタンダード」を意識した公開授業を実施した。また、指導案及びワークシート等を、市内ネットワークシステムを活用した共有フォルダに集め、市内教員がいつでも活用できるようにしている。

また、年3回「学力の花」通信の作成を依頼し、市内各小中学校に配信し「新大分スタンダード」を踏まえた授業づくりを推進した。

### ○学力向上対策委員会の実施

全国学力・学習状況調査の結果を受け、学力向上支援教員等による分析と今後の対策をまとめ、校長連絡会等で周知するとともに、各学校にも分析を行い今後の対策について報告してもらった。また、杵築市学力向上対策委員会を開き、小中学校の教員を対象にB問題を活用した授業づくりについて研修会を行った。

### ○校内研究及び教科部会の取組の成果の交流

各小中学校の校内研究と市教育課程研究協議会の1年間の取組と成果を、「きつきの教育研究」にまとめて還流をした。

**杵築市**  
**「学力の花」通信** 平成28年11月16日(水)  
学力向上支援教員(小国語) 佐々木美治

**第2回 公開授業** 10月27日(木)に大内小学校にて、第2回の公開授業を1  
1佐々木・12藤井リカ先生で行いました。4年生生物語文教材  
「世界一美しいほくの村」「世界一美しい村へ帰る」の実践で  
す。

<単元名> 「つなげて読んでわかったよ読書会」で、つながりのある物語のおもしろさを伝え  
合おう。(C読むこと)言語活動制の「工船介したいを取り上げて説明すること」を員徳化)

<指導事項> 目的や必要に応じて、文章の  
要点や細かい点に注意しながら読み、文  
章などを引用したり要約したりすること  
(C工) ↓ 下理解対応

<単元の目標> つながりのある物語の読みしるさ  
感を得るために、大事な出来事や、人物や物語の  
世界の様子などに目を向けて読み、大切なことまと  
めたり、引用したりすることができる。

**授業の実際**  
評価規準を明確に持つことで・・・

「この1時間でどの子どもが、何のどのようできていたらよ  
いか」という評価規準を、指導者も子どもも、はっきり持  
って臨むことに重点を置きました

板書や、指示など、ねらいにそなえるための具体的な手  
立てが準備できました。

それぞれの子どもたちに、評価規準に基づいた具体  
的な声かけができました。

<本時の評価規準>  
「世界一美しいほくの村」「世界一美しい村へ帰る」**両  
方**の人物や物語の世界に目を向けて読み、つなげて読  
んでわかったことを付箋にまとめている。

どちらか一方  
ではだめなん  
だ・・・

子どもたち、自分ができていたらいいかを明確  
に挙げて活動できれよ。

詳しい指導案や、カードのデータ等を学校間共有フォル  
ダの「学力の花」に入れています。ご活用ください。

### 指導教諭、学力向上支援教員による発表

**1 B問題を活用した授業の実際**

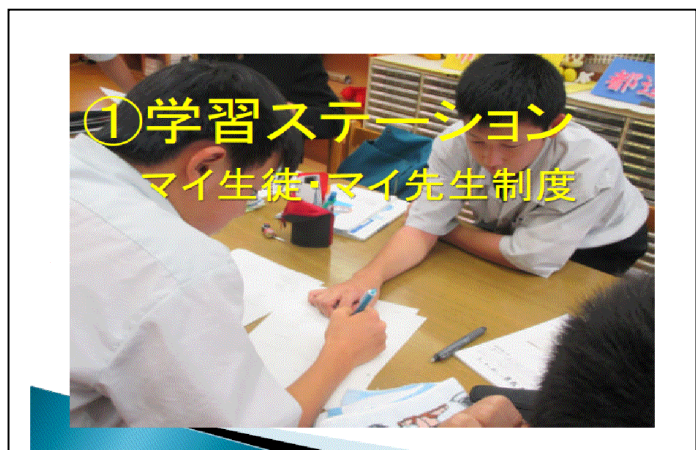
**題 材** まど・みちおの2つの詩を比べて読み、考えたことを伝え合おう  
(平成26年度 全国学力・学習状況調査B問題)

**目 標** 2つの詩を比べて読み、内容や表現の工夫をとらえら  
るとともに、それらについて自分の考えを書くことができる。

**学習指導要領に示されている領域・内容・関連する言語事項**

<領域・内容>  
〔第5学年及び第6学年〕C 読むこと  
エ 登場人物の相互関係や心情、場面などについての描写をとらえ、優れた  
叙述について自分の考えをまとめること。  
〔第5学年及び第6学年〕B 書くこと  
ウ 事実と感想、意見などを区別するとともに、目的や意図に応じて簡単に書  
いたりくわしく書いたりすること。

<言語活動例>  
〔第3学年及び第4学年〕C 読むこと  
ア 物語や詩を読み、感想を述べ合うこと。



### 3. 実践研究の成果の把握・検証

#### 【平成28年度全国学力・学習状況調査（平成28年4月19日実施）】

教科	小6・国		小6・算		中3・国		中3・数	
	A知識	B活用	A知識	B活用	A知識	B活用	A知識	B活用
杵築市正答率	71.3	56.3	77.5	45.7	74.1	65.4	57.2	41.9
大分県正答率	72.7	58.2	77.9	46.7	74.7	66.2	60.9	42.1
全国正答率	72.9	57.8	77.6	47.2	75.6	66.5	62.2	44.1
標準化得点	99	99	100	99	99	100	98	99

#### 【平成28年杵築市基礎基本定着状況調査（平成29年1月12日実施）】

		小学3年		小学4年			小学5年			小学6年		
		国語	算数	国語	算数	理科	国語	算数	理科	国語	算数	理科
正答率 (%)	市	74.1	73.6	76.4	71.8	69.6	78.6	69.7	75.3	79.6	73.2	70.3
	全国	66.3	67.1	68.0	63.7	66.6	72.2	60.2	69.7	75.3	66.5	64.3
標準スコア	市	54.3	53.4	54.6	53.9	51.7	53.8	55.0	53.0	52.6	53.5	53.6

		中学1年				中学2年			
		国語	数学	理科	英語	国語	数学	理科	英語
正答率 (%)	市	68.4	57.7	61.1	59.9	71.4	58.0	60.0	55.0
	全国	63.9	58.4	57.8	61.2	64.0	60.1	56.1	53.2
標準スコア	市	52.5	49.7	51.7	49.4	54.3	49.1	51.8	50.8

#### ○平成28年4月実施の「平成28年度全国学力・学習状況調査」において

##### 【達成指標について】

- ・「知識」の平均正答率が全国を超えた児童・生徒の割合67%をめざす。  
→56%（小57%、中54%）
- ・「活用」の平均正答率が全国を超えた児童・生徒の割合54%をめざす。  
→54%（小57%、中52%）

「思考力・判断力・表現力」等を育成するための、活用型授業や学校図書館の活用を推進してきた結果、全国平均正答率には及ばなかったものの、昨年度に比べ「活用」する力は伸びてきている。一方で、「知識・技能」の力の伸びが見られなかった。

##### 【取組指標について】

全国学力・学習状況調査の活用について各小中学校に周知した結果、実際に調査問題を解いた教員は95%であり、91%が指導の改善に役立てていると回答している。調査問題、解説資料、報告書の活用は進んできているといえる。

また、調査結果から、一層の基礎的・基本的な知識・技能の定着及び活用する力の育成について周知した。

## ○平成29年1月実施の「平成28年度杵築市基礎基本定着状況調査」について

全国学力・学習状況調査の結果を受け、全ての教科で標準スコア52以上をめざして授業改善を進めてきた。

小学校では小学校4年生「理科」以外で達成することができた。小学校6年生の状況も、4月の全国学力学習状況調査から改善が見られる。中学校では、中学校1年生「数学」「英語」、中学校2年生「数学」で標準スコア50を超えることができず、依然として課題が残る。しかし、「国語」については、中学校1年生、中学校2年生ともに標準スコア52を達成することができている。「国語」では、小中を通じて言語活動が設定された問題解決的な授業が定着していることが、「知識」だけでなく「活用」でも安定した結果につながっていると考えられる。「数学」「英語」については、低学力層の割合も多く、個に応じたきめ細かな指導が一層必要であり、基礎的・基本的な知識・技能の定着にむけた取組を進めていく。

### 4. 今後の課題

「学びに向かう力」と思考力・判断力・表現力等の育成のためには、「主体的な学び」を促す「めあて」「課題」「まとめ」「振り返り」を設定した問題解決的な授業を、全ての教員が実践する必要がある。各学校に周知するとともに、指導主事による訪問等で実際の授業について指導助言していく。

また、「協力校」である宗近中学校の生徒による「目標設定サイクル」や「学習ステーション」の取組を市内中学校に広め、「主体的な学び」の推進を図る必要がある。

課題のある教科については、基礎的・基本的な知識・技能の習得が不十分であることから、全ての教員が授業の「ねらい」を明確に持ち、中心となる学習活動が「習得」なのか「活用」なのかを考えて、時間配分や授業形態等を工夫するよう指導助言していく。

「課題発見・解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成28年度委託事業完了報告書

【協力校】

都道府県名	大分県	番号	44
-------	-----	----	----

協力校名	大分県杵築市立宗近中学校
------	--------------

○ 協力校として実施した取組内容

1. 当初の課題

本校では、これまでの3年間で「基礎・基本の確実な定着」を学校経営の最重点目標の一つに位置づけ、授業改善に向けて取り組み、ほぼ全国平均並みの基礎・基本的な知識・技能を身につけさせることができたと評価している。

その一方で、学力層の二極化が見られるとともに、活用する力を問われる問題で、特に国・県との正答率との開きが顕著であることが明らかとなった。活用する力を身に付けるためには、課題を的確に受け止め、情報を集めたり、分析したりして自分の考えをまとめ、それを発信していく学習経験の積み重ねが必要となる。また、生徒自身がその時間に自分が身に付けておくべき学習内容を明らかにし、互いに認め合い学び合う場を構築することによって、生徒の学びに向かう力が育成され、学力の向上が期待される。

2. 協力校としての取組状況

(1) 研究仮説

問題解決型の学習課題や発問を工夫することにより、生徒の多様な考えを導き出し、さらに、それを板書に位置づけ整理することで、生徒の考えを広げたり、深めたり、つきとめたり、振り返ったりする助けとなり、生徒に「活用する力」を育むことができるであろう。

(2) 研究内容

- (1) 生徒アンケートの実施
- (2) 学力向上プランの作成
- (3) 活用する力の育成を目指した問題解決型の問いの工夫
- (4) (3) に連動した板書の工夫
- (5) 基礎・基本事項定着のための習熟の程度に応じた支援と補充学習
- (6) 生徒会の自治活動による学びに向かう態度の育成
- (7) 家庭との協働による学習意欲の喚起
- (8) 学習環境の整備
- (9) その他

(3) 取組の実際

**習熟の程度に応じた指導**

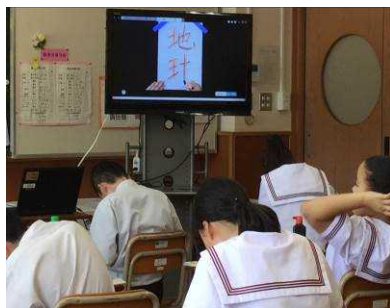


基礎クラス

数学科では、習熟の程度に応じて基礎クラスと応用クラスに分けて指導を行なっている。応用クラスはグループによる学び合いを主体とした学習、基礎クラスは、個々へのきめ細かい支援が可能になるまで人数を絞って指導するという基本方針である。

**ICTを活用した指導**

各階にデジタル教科書インストール済みのPCを、電子黒板と大型テレビに固定。各学年常時2セットずつ稼働可能な状態にしている。

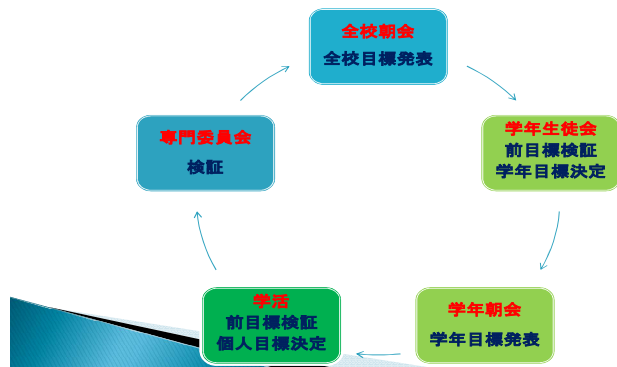


**目標設定サイクル～生徒会文化委員会**

【全校・学年集団が一ヶ月のサイクルで達成する目標】

①学校目標→②文化委員会目標&生活委員会目標

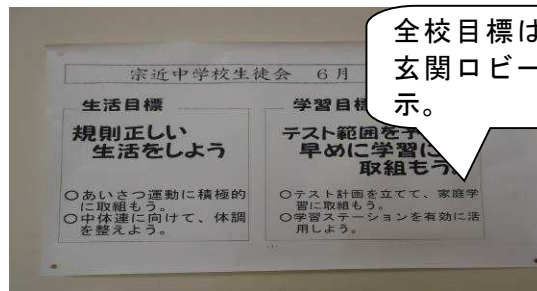
**②主体的な学び  
A文化委員会の目標検証サイクル**



- 1週目（月）全校目標発表
- 1週目（金）前目標検証  
学年目標決定
- 2週目（月）学年目標発表  
前目標検証  
個人目標決定
- 3週目（月）中間検証
- 4週目（金）専門委員会検証



全校朝会で執行部が全校目標を発表



全校目標は各階や玄関ロビー等に掲示。

### ③ 学年生徒会の目標・・・具体的な行動目標

※学年生徒会主導で、その月の文化委員会の目標と生活委員会の目標の達成のための行動目標を決定する。

(文化・生活の両方があるので、優先順位を決め、学年の実態や行事を考慮して、学年レベルで決定。)

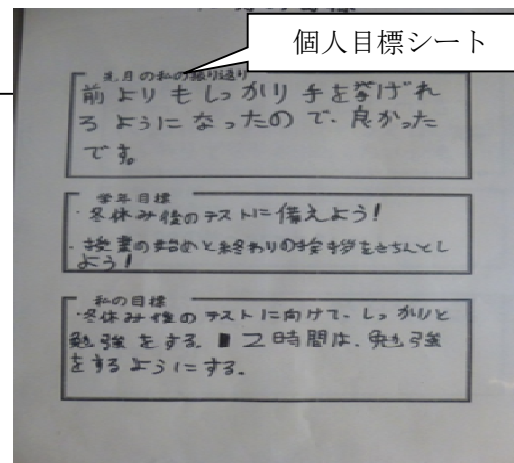


### ④ 個人目標(文化委員会)

学年生徒会の目標を達成するための個人目標を考え、文化委員会指定の用紙に今月の個人目標を書く。

▶ 学年生徒会で達成できたかを検証し、次の週の取り組みを決める。(学年生徒会)

▶ 翌月の個人目標を立てるときに、前月の振り返りをする。(個人)



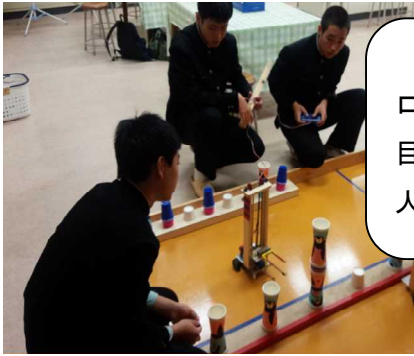
## 学習ステーション～生徒会図書委員会

月・火・木・金の放課後16:10～17:00 (3年17:30)

各階で学び合い学習や補充学習のための部屋を開放。

- ① 目的～生徒に誰でも使える学びの場を提供することで、自発的に学びに向かい、学びを楽しむ態度を育む。
- ② 昨年度の現状～ 1年・・・週1、2回の居残り学習。テスト前の補充・質問教室  
2年・・・テスト前を中心とした補充・質問教室。昼休みの宿題完了学習。  
3年・・・ほぼ毎日の自主的な質問教室。
- ③ めざす姿～自発的に生徒が学び合い、教え合う学びの場
- ④ 実際の運営
  - ・ 生徒会の図書委員会で週4日間の担当を固定し、生徒による運営を行う。
  - ・ 補充学習と教え合い学習の場、あるいは自習スペースとして活用。
  - ・ 生徒から学習サポーターを公募し、わからないところを教えたり、一緒に勉強したり、様々な学習環境の整備にあたる。  
(例) 気になる新聞記事切り抜き、学習用語掲示、学習ノートの提供、予想問題集作成など
  - ・ 学習ノートや進路情報等の展示を行う。

生徒の多様なニーズに応える「学習ステーション」



**ロボコンゾーン**  
ロボットコンテストの出場を目指してロボット制作に励む人の部屋



**集中ゾーン**  
静かに、集中して学習したい人の部屋

学習ステーションでは先生が付いて補充学習も実施



**学び合いゾーン**  
教え合ったり問題を出し合ったりして学習する部屋

家庭との協働による学習意欲の喚起

【家庭学習のてびき】

**家庭学習5つのポイント**

1. まず、宿題・予習・復習・自分勉強
2. 決まった時間に決まった場所で
3. やることを表める (100字書く、20問解くなど)
4. 前まわりをきれいに
5. 目と口と手を使って覚える

**伸び悩みの原因は？**

学校で覚えるの難関まるうつし...  
教科書もワークも学校にやきおぼし...  
取っかかるとゲームやテレビ...  
携帯電話やゲームを手放せない...  
覚えるのは楽にならないから...

**学校の授業**   **家庭学習の継続**   **学力UP!!**

学年	10分×学習	20分×学習	30分×学習
1年生	10分×7=70分	10分×7=70分	10分×7=70分
2年生	10分×8=80分	10分×8=80分	10分×8=80分
3年生	10分×9=90分	10分×9=90分	10分×9=90分

【声かけシート】

**やる気が出てくる魔法の言葉**

- ① 努力をほめる
- ② 人と比べず過去と比べる
- ③ 自分で決めさせる

「○○さん、頑張りましたね。」「○○さん、よく頑張りましたね。」「○○さん、よく頑張りましたね。」

「○○さん、よく頑張りましたね。」「○○さん、よく頑張りましたね。」「○○さん、よく頑張りましたね。」

「○○さん、よく頑張りましたね。」「○○さん、よく頑張りましたね。」「○○さん、よく頑張りましたね。」

「○○さん、よく頑張りましたね。」「○○さん、よく頑張りましたね。」「○○さん、よく頑張りましたね。」

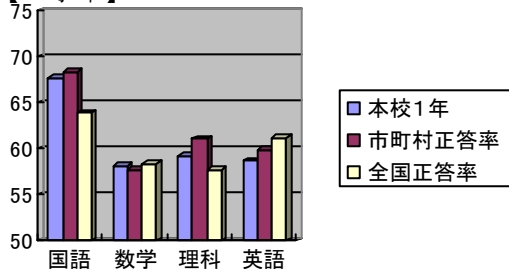
【オープンスクールデイズ】



3. 取組の成果の把握・検証

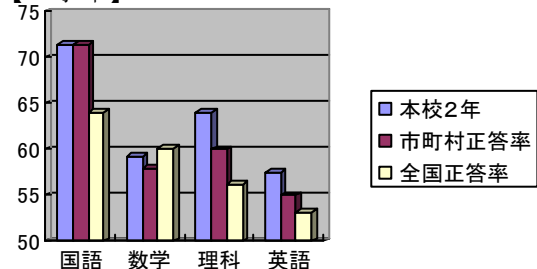
○平成28年度杵築市基礎基本定着状況調査結果 (H29・1・12実施)

【1学年】



	国語	数学	理科	英語
本校	67.8	58.2	59.3	58.7
市	68.4	57.7	61.1	59.9
全国	63.9	58.4	57.8	61.2

【2学年】

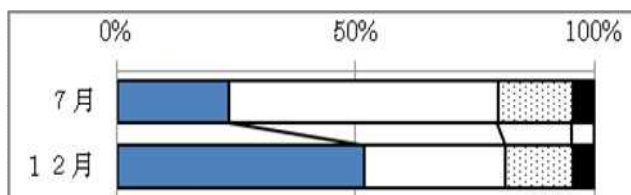
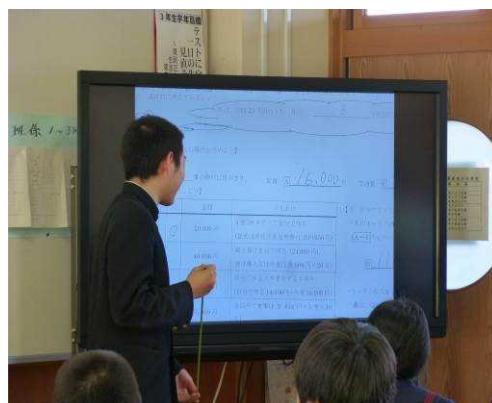


	国語	数学	理科	英語
本校	71.4	59.3	64.0	57.6
市	71.4	58.0	60.0	55.0
全国	64.0	60.1	56.1	53.2



### (1) 問題解決的展開の学習

生徒アンケートで「授業では課題の解決に向けて話し合いながら整理して発表する等の学習活動に取り組んでいたと思う。」の肯定的評価が全校で約82%であり、授業改善が問題解決的展開の授業に向かって進んでいると言って良い。特に、7月より12月の調査では「当てはまる」が増加していることから、2学期はじっくりと活用力の育成に取り組めたと評価できる。



授業では課題の解決に向けて話し合いながら整理して発表するなどの学習活動に取り組んでいたと思う。(3年生徒アンケート)

### (2) 板書の構造化による思考の流れの可視化

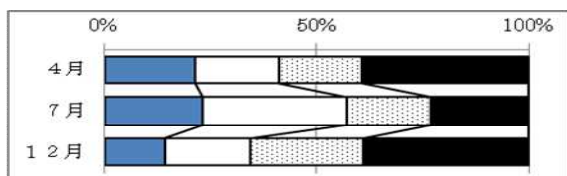
問題解決的展開の学習での板書パターンを決めることで、1時間の学習過程も決まってくる。それによって、生徒が見通しを持って、課題の把握→個人の思考→グループ討議→全体交流・討議→まとめ・振り返りという見通しができる。



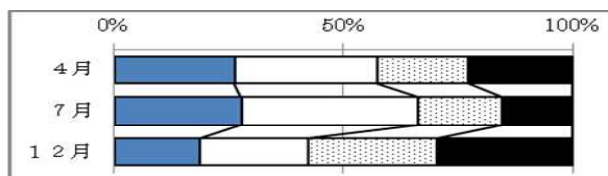
### (3) 説明力の向上



「自分の考えを他人に説明したり、文章に書いたりするのは難しい」「400字詰め原稿用紙2枚程度の感想文や説明文を書くことは難しい」という質問項目で、否定率が向上している。特に3年生では否定率が58%・67%と肯定率を大きく上回り、今後社会に出て説明力を求められる場面で生かせるのではないかと期待している。



400字詰め原稿用紙2枚程度の感想文や説明文を書くことは難しい。(3年生徒アンケート)



自分の考えを他人に説明したり、文章に書いたりするのは難しい。(3年生徒アンケート)

#### (4) 学びに向かう力「目標設定サイクル」

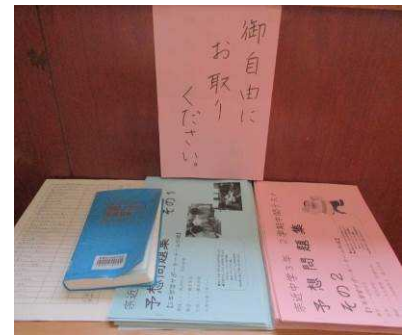
文化委員会の「目標設定サイクル」によって、1か月単位で自己目標を設定し、振り返るという流れが定着した。文化委員が学級で地道に声をかけたり、チェックをくり返したりする中で、目標自体の質も「～にがんばる」といったおおざっぱなものから、「1日2時間学習する。」「1時間に2回以上手を挙げる。」などの検証しやすいものに変化してきた。

#### (5) 学びに向かう力「学習ステーション」

5月24日～)	95
6月	390
7月(5日間)	90
1学期合計	575
9月	134
10月	279
～11月26日	370
12月	260
2学期合計	1043
1月	161
2月	96

図書委員会の「学習ステーション」は学び合いの効果をねらったものである。参加者は毎月全校でのべ200人前後、1日の利用者数が各学年平均7～8人。多い日は30人を超える。3年生は「MY生徒・MY先生制度」を推奨し、グループで利用する生徒が多い。わからないところを気軽に尋ねるだけでなく、学習面での悩みを共有し、解決する場にもなっている。また、生徒の中から学習サポーター10名を認定し、学習支援と新聞切り抜き・掲示による社会への関心の向上、さらに定期考査前には高品質の予想問題の作成に取り組んだ。「教えてもらう」側はもちろんだが、「教える」上位層の生徒にとっても有効な手段であった。どういう言い方で説明すればわかってもらえるのか、どんな問題を出せば身につけさせられるのか、そういった思考ができるようになった。また、予想問題集は思った以上の成果で、サポーター

達はできるだけ自分の苦手教科を選んで作成し、それによって確かな理解への効果を実感したようであった。



#### 4. 今後の課題

生徒アンケートによると、国社数理英5教科の授業の「わかる」の肯定率は平均80%程である。授業改善が進み、振り返りの際に生徒自身が「わかった」と答えている。しかし、一方で学校の重点目標の一つである「学力状況調査や定期考査で正答率40%未満の生徒を20%未満にする」という



指標が達成できていない現状がある。これは、授業で理解したことの復習による定着が図れていないことが原因であろう。家庭での学習の時間がとれていない。「決まった時間に決まった場所で復習を」が理想であるが、メディア端末の異常なまでに長い使用時間が物語るように、家に帰って「学びに向かう」生徒は少ない現状は打破できていない。今後、授業で学習したことの定着と生徒の興味関心を広げる家庭学習を目指し、家庭との連携を深め、具体的方策を模索していく必要がある。

「課題発見・解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成28年度委託事業完了報告書

【協力校】

都道府県名	大分県	番号	44
-------	-----	----	----

協力校名	大分県杵築市立宗近中学校
------	--------------

○ 協力校として実施した取組内容

1. 当初の課題

本校では、これまでの3年間で「基礎・基本の確実な定着」を学校経営の最重点目標の一つに位置づけ、授業改善に向けて取り組み、ほぼ全国平均並みの基礎・基本的な知識・技能を身につけさせることができたと評価している。

その一方で、学力層の二極化が見られるとともに、活用する力を問われる問題で、特に国・県との正答率との開きが顕著であることが明らかとなった。活用する力を身に付けるためには、課題を的確に受け止め、情報を集めたり、分析したりして自分の考えをまとめ、それを発信していく学習経験の積み重ねが必要となる。また、生徒自身がその時間に自分が身に付けておくべき学習内容を明らかにし、互いに認め合い学び合う場を構築することによって、生徒の学びに向かう力が育成され、学力の向上が期待される。

2. 協力校としての取組状況

(1) 研究仮説

問題解決型の学習課題や発問を工夫することにより、生徒の多様な考えを導き出し、さらに、それを板書に位置づけ整理することで、生徒の考えを広げたり、深めたり、つきとめたり、振り返ったりする助けとなり、生徒に「活用する力」を育むことができるであろう。

(2) 研究内容

- (1) 生徒アンケートの実施
- (2) 学力向上プランの作成
- (3) 活用する力の育成を目指した問題解決型の問いの工夫
- (4) (3) に連動した板書の工夫
- (5) 基礎・基本事項定着のための習熟の程度に応じた支援と補充学習
- (6) 生徒会の自治活動による学びに向かう態度の育成
- (7) 家庭との協働による学習意欲の喚起
- (8) 学習環境の整備
- (9) その他

(3) 取組の実際

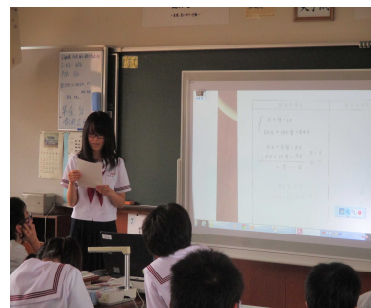
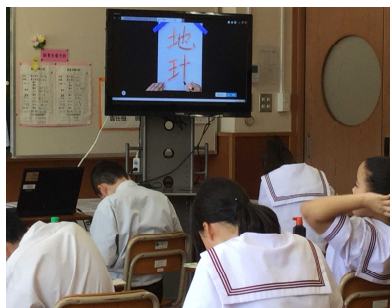
**習熟の程度に応じた指導**



数学科では、習熟の程度に応じて基礎クラスと応用クラスに分けて指導を行なっている。応用クラスはグループによる学び合いを主体とした学習、基礎クラスは、個々へのきめ細かい支援が可能になるまで人数を絞って指導するという基本方針である。

**ICTを活用した指導**

各階にデジタル教科書インストール済みのPCを、電子黒板と大型テレビに固定。各学年常時2セットずつ稼働可能な状態にしている。

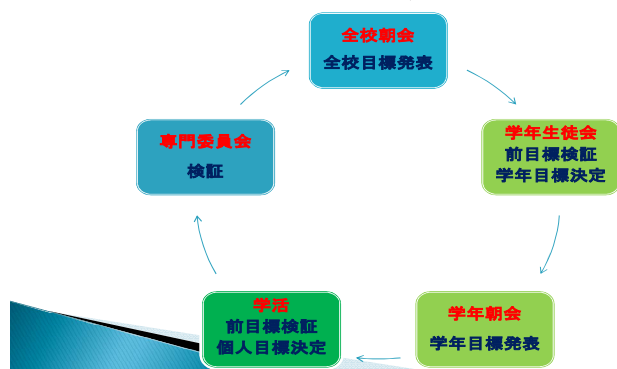


**目標設定サイクル～生徒会文化委員会**

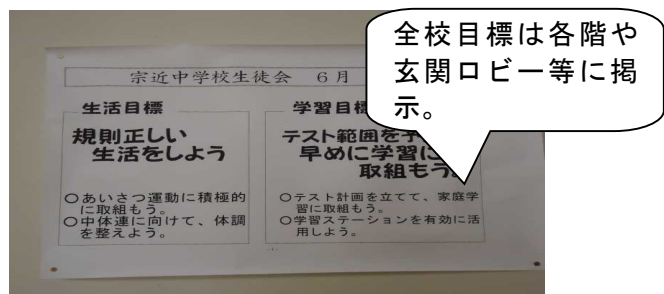
【全校・学年集団が一ヶ月のサイクルで達成する目標】

①学校目標→②文化委員会目標&生活委員会目標

**②主体的な学び  
A文化委員会の目標検証サイクル**



- 1週目 (月) 全校目標発表
- 1週目 (金) 前目標検証  
学年目標決定
- 2週目 (月) 学年目標発表  
前目標検証  
個人目標決定
- 3週目 (月) 中間検証
- 4週目 (金) 専門委員会検証



### ③ 学年生徒会の目標・・・具体的な行動目標

※学年生徒会主導で、その月の文化委員会の目標と生活委員会の目標の達成のための行動目標を決定する。

(文化・生活の両方があるので、優先順位を決め、学年の実態や行事を考慮して、学年レベルで決定。)

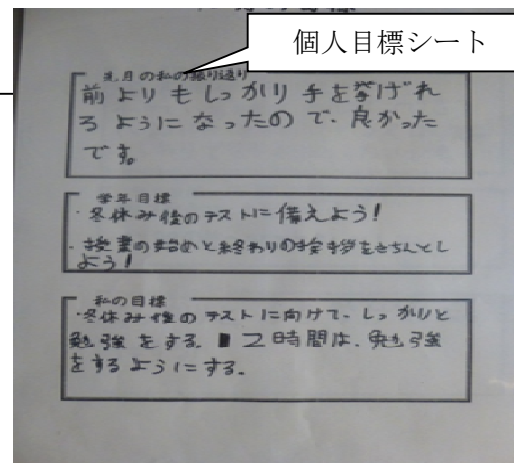


### ④ 個人目標(文化委員会)

学年生徒会の目標を達成するための個人目標を考え、文化委員会指定の用紙に今月の個人目標を書く。

▶ 学年生徒会で達成できたかを検証し、次の週の取り組みを決める。(学年生徒会)

▶ 翌月の個人目標を立てるときに、前月の振り返りをする。(個人)



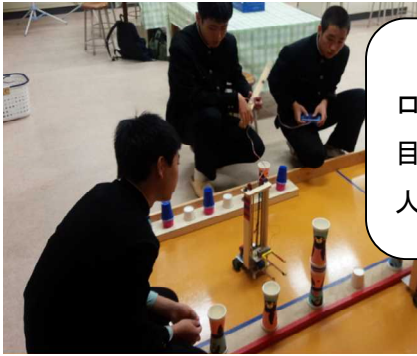
### 学習ステーション～生徒会図書委員会

月・火・木・金の放課後16:10～17:00 (3年17:30)

各階で学び合い学習や補充学習のための部屋を開放。

- ① 目的～生徒に誰でも使える学びの場を提供することで、自発的に学びに向かい、学びを楽しむ態度を育む。
- ② 昨年度の現状～ 1年・・・週1、2回の居残り学習。テスト前の補充・質問教室  
2年・・・テスト前を中心とした補充・質問教室。昼休みの宿題完了学習。  
3年・・・ほぼ毎日の自主的な質問教室。
- ③ めざす姿～自発的に生徒が学び合い、教え合う学びの場
- ④ 実際の運営
  - ・ 生徒会の図書委員会で週4日間の担当を固定し、生徒による運営を行う。
  - ・ 補充学習と教え合い学習の場、あるいは自習スペースとして活用。
  - ・ 生徒から学習サポーターを公募し、わからないところを教えたり、一緒に勉強したり、様々な学習環境の整備にあたる。  
(例) 気になる新聞記事切り抜き、学習用語掲示、学習ノートの提供、予想問題集作成など
  - ・ 学習ノートや進路情報等の展示を行う。

生徒の多様なニーズに応える「学習ステーション」



**ロボコンゾーン**  
 ロボットコンテストの出場を目指してロボット制作に励む人の部屋



**集中ゾーン**  
 静かに、集中して学習したい人の部屋

学習ステーションでは先生が付いて補充学習も実施



**学び合いゾーン**  
 教え合ったり問題を出し合ったりして学習する部屋

家庭との協働による学習意欲の喚起

【家庭学習のてびき】

**家庭学習5つのポイント**

1. 決まった時間・学習・復習・自分勉強
2. 決まった時間に決まった場所でする(100字書く、20問解くなど)
3. やることを決める(100字書く、20問解くなど)
4. 前まわりをきれいに
5. 目と口と手を使って覚える

**伸び悩みの原因?**

- 学校で友達と遊ぶ時間がない
- 教科書もノートも学校に忘れてしまう
- 机の上が散らかる
- 携帯電話やゲームを手放さない
- やるのは決まってるけど、やる気が出ない

**学校の授業** vs **家庭学習の歴史**

**学力UP!!**

【声かけシート】

**やる気が出てくる魔法の言葉**

- ① 努力をほめる
- ② 人と比べず過去と比べる
- ③ 自分で決めさせる

君自身の学習ノートを見て、保護者から19日間の目標達成状況をオースマスです。

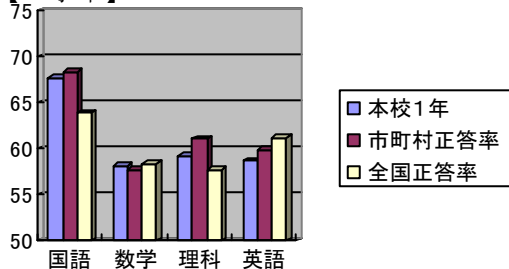
【オープンスクールデイズ】



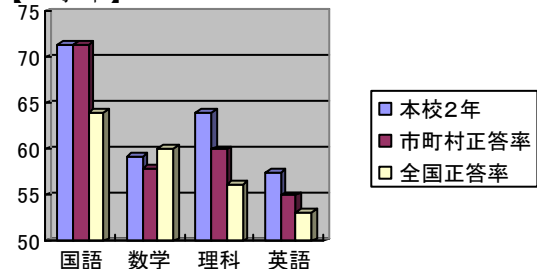
3. 取組の成果の把握・検証

○平成28年度杵築市基礎基本定着状況調査結果 (H29・1・12実施)

【1学年】



【2学年】



	国語	数学	理科	英語
本校	67.8	58.2	59.3	58.7
市	68.4	57.7	61.1	59.9
全国	63.9	58.4	57.8	61.2

	国語	数学	理科	英語
本校	71.4	59.3	64.0	57.6
市	71.4	58.0	60.0	55.0
全国	64.0	60.1	56.1	53.2